

ライティングセンターにおける相談記録の分析

—学生からの相談事項に着目して—

岩崎 千晶*, 稲葉 利江子[†], 小林 至道*, 本村 康哲**

関西大学* 津田塾大学[†] 関西大学**

教育推進部 学芸学部 文学部

ciwasaki@kansai-u.ac.jp, inaba@tsuda.ac.jp,

motomura@kansai-u.ac.jp, nkoba@kansai-u.ac.jp

概要：大規模私立大学である関西大学では、2011 年度よりライティングセンターを開設し、学生のライティング支援にあたっている。ライティングセンターでは、Web システムを活用して、オンライン予約を受け付けしたり、学生からの相談内容や TA の指導履歴を記録している。本発表では、WEB システムに蓄積された学生の相談事項に着目して分析を行い、学生が抱えている課題と学年暦における相談時期の傾向を分析する。さらに、分析の結果をもとに、ライティングセンターの運営やライティング指導に関する手立てを提案し、ライティング指導の充実を目指す。

1 はじめに

大学のユニバーサル化に伴い、学力や学習動機が多様な学生が入学し、学生の読み書きに関する基礎的な力の低下が指摘されている(井下 2008)。そこで、大学は正課教育において文章作成に関する授業実践を取り入れたり、4年間を通じて書く力を培うためのカリキュラム編成をしたりするなど、書く力を育成するための様々な取り組みを実施している(山田 2012)。

とりわけ昨今では、ライティングセンター(以下センター)やライティングデスクを設け、正課外においてレポート作成を支援する取り組みが増えつつある(たとえば早稲田大学、国際基督教大学、立命館大学など)。センターでは、TA(Teaching Assistant) が学生の持ち込んだレポートに対して個別に相談対応を行っており、その効果が指摘されている(岩崎 2013)。

その一方で、学生がどのような課題を抱え、また、どの時期にセンターを利用しているのかといった利用動向に関する研究は十分に蓄積されていない。しかし、学生の相談内容に関する傾向が明らかになれば、授業やセンターにおいてレポート指導をする際に活かすことができると考える。また、センターの利用時期と相談内容を把握することで、学生のタイムリーなニーズに応じた授業の展開、講習会の実施、TA の確保等が可能になる。ライティング支援施設の運営面ばかりではなく、

正課教育、図書館などの関連部署との連携を進める上でも有益だと考えられる。

そこで、本研究では、センターに寄せられた学生の相談内容、相談時期の傾向を分析し、ライティング指導、運営に関する手立てを提案することを目的とする。

2 研究方法

2.1 実践の概要

本研究では、大規模私立大学である関西大学のセンターを対象とする。関西大学は、2011 年度にセンターを開設し、学部生を対象に TA が文章作成に関する相談を受けている(1回 40分程度)。

センターには博士課程後期課程の院生 20 名が TA として所属している(2013 年 10 月現在)。センターでは、学生自身の気づきを促すライティング支援を基本理念としている。したがって、TA の役割は文章添削ではなく、自分で書いた文章が抱える問題点に自分自身で気づき、自らそれを書き直すことができるような力を育成することである。

学生は、相談をするにあたって WEB システム(まなかん WEB)を活用して、オンライン予約を行う。その際、相談内容を記入し、事前に執筆したレポートがあればファイルの添付を行う(金田 2012)。なお、予約を取らずに訪問することも可能である。

2.2 研究方法

本研究では、学生の相談内容、年間を通じた相談時期の傾向を把握するために、2012年秋学期と2013年春学期においてWEBシステムに登録されている学生の相談記録629件（春学期：458件、秋学期：171件）を分析データとして扱う。

相談内容に関しては、レポートの種類と相談内容に分けてその傾向を分析する。レポートの種類は、学生から寄せられた相談事項や科目情報を基に分類をした。相談内容に関しては、学生の相談内容をもとにコーディングを実施し、カテゴリとコードに分類した。相談時期に関しては、学年歴のどの時期にどのような科目に関する相談件数が多いのかを分析した。

これらのコーディング作業は筆者らで分担し行った。コーディング後、それぞれの担当箇所以外の確認を行い、分類の判断が異なる箇所は協議を経て、最終的な分類を決定した。

3 結果と考察

3.1 レポートの種類、相談内容の傾向

レポートの種類に関する分析結果を表1に示す。最も多かったのは論証型レポートである。自分なりの主張を考え、論理的にレポートを書くことの重要性が求められていることが示されたが、それに課題を抱える学生も多いことが明らかとなった。

次いで、授業で学んだ事柄や概念をまとめたり、説明したりする学習レポートである。学習レポートの相談は、169件のうち120件は初年次生であり、初年次生が授業で学んだ事柄や理念について述べ、紹介するようなレポート作成に課題を抱えている様子が指摘された。

このほか、レジュメ、スライドに関する相談もあり、多岐にわたるライティング相談が寄せられていることが示唆された。

こうした状況から、TAには相談内容に応じて多様な対応が求められることが分かった。そのため、センターでは、レポートの種類により学生が陥りやすい躓きや改善の手立てを共有することなど相談内容に応じた研修の機会やそれに応じた教材を開発することが必要になると考えられる。

続いて、レポートの相談傾向に関する分析結果を表2に示す。分析の結果、8つのカテゴリ、42のコードが生成された。

表1 レポートの種類

レポートの種類	相談件数
論証型レポート	220
学習レポート	169
卒業論文	81
レジュメ	53
読書レポート	25
志望理由書	21
スライド	15
実験・実証型レポート	4
小論文	3
外国語	3
その他	8
判別不能（未記入）	25

相談内容として最も多かったのは、執筆したレポートの全般的な確認を希望する学生である。同様に、レポートの基本的な書き方の相談も多かった。こうした傾向からは、多くの学生が、自分の書いたレポートの問題点を自ら焦点化できていない点、また、レポートとはどういったものであるのか、どのような書き方をすればいいのか、といったレポートそのものや基本的な書き方の理解が不足していることが明らかになった。

文章構成に関するコードも多かったが、そこでは序論・本論・結論といったレポートの型が成立しているのかを相談する学生が目立った。この他には、文献利用、研究方法、PC操作まで幅広い相談が寄せられていた。

以上のことから、相談を焦点化できていない学生に関しては、相談内容を事前に記入するWEBシステム上に、学生が躓きがちな相談事項とその説明を選択式で提示する（例：文章構成＝レポートの型になっているかどうか相談したい）ことで、学生が自らの相談内容を的確に判断することができるようなシステム上の工夫が考えられる。

また、相談が多い項目に関しては、センターが重点的に学生向けの講習会（例：レポートとは何か？レポートで求められる型や内容とは？など）を開講したり、TAによる指導技術を強化したりするための研修を行うなどして対応する必要がある。このほかにも、正課教育において授業を担当している教員に対して、学生の躓いている点を共有する機会を設けるなどして、正課と正課外の両方で連携を取りながら学生の書く力を育てていくための手立てを検討していくことの必要性が指摘された。文献の探し方などに関しては図書館との連携も考える必要がある。

表2 生成されたカテゴリー・コード

カテゴリー	コード	件数	
確認 (259)	全般	175	
	部分	10	
	修正点	20	
	基本的な書き方 (執筆後)	54	
執筆準備 (111)	基本的な書き方 (執筆前)	89	
	課題の理解	12	
	発想	10	
文章表現・表記 (84)	誤字脱字	6	
	語法	16	
	句読点	2	
	文の長さ	2	
	文字数の増減	11	
	わかりやすさ	15	
	言葉遣い (表記表現含む)	32	
文章構成 (176)	レポートの型	60	
	PREP	14	
	タイトル見出し	5	
	問いと主張	11	
	根拠	13	
	論理の展開	39	
	まとめ方	28	
	補足	2	
	反論	1	
	比較	3	
	文献利用 (53)	文献の探し方	7
		文献の読み方	1
		文献の解釈	1
引用の方法		35	
文献一覧・注釈		9	
研究方法 (11)	研究の方向性	4	
	研究方法全般	4	
	調査の方法	1	
	分析の方法	2	
レイアウト (14)	表紙	3	
	目次	2	
	図表	7	
	フォント	2	
PC操作 (4)	ワープロ	2	
	エクセル	1	
	パワーポイント	1	
その他 (4)	その他	4	
未記入 (104)	未記入	104	

3.2 学年歴における相談時期

2012年度秋学期および2013年度春学期における相談時期と授業に関する関係を図1に示す。センターでは、ガイダンス依頼や利用指示などを行うなど授業科目との連携を行っている。そこで、連携授業、それ以外の一般授業、卒業論文関係、その他というカテゴリーにわけ、学年歴における相談件数を示した。その他は、志望理由書、手紙

などの授業とは異なる内容である。

秋学期は、卒業論文関係が多く、12月に至っては、62.9%の割合となっている。一方、春学期は、連携授業および一般授業関係の相談件数が9割以上を占めていることがわかる。また、春学期において把握可能な一般授業の科目数も36と分野や課題の内容が多岐に渡っていることが示された。

以上のことから、秋学期は卒業論文などの論文形式のライティング指導ができるTAの確保が重要であり、春学期は、多岐の形式におけるレポート課題に対応が可能なTAの確保が必要になることがわかる。

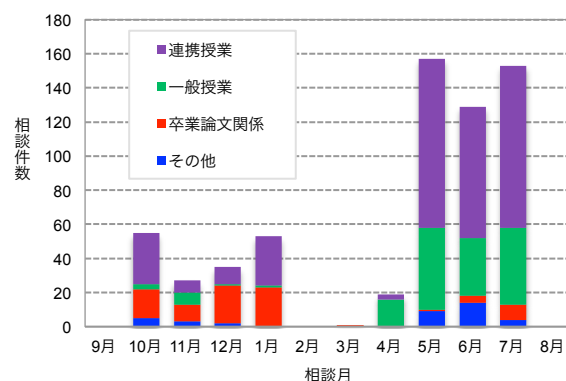


図1 学年歴における相談件数

4 今後の展望

今後は、レポートの種類、学年による課題の傾向を明らかにし、ライティング指導で取り上げる内容やその手立てについて改めて検討を行うことが求められる。

参考文献

- [1] 井下千以子、「大学における書く力考える力」、3-9、東信堂、2008
- [2] 岩崎千晶、實淵洋嗣、「初年次教育においてライティングセンターを活用した学生のレポートとTAによる相談記録の分析」、日本教育工学会全国大会要綱集、249-250、2013
- [3] 金田純平、本村康哲、林田定男、實淵洋次、「ライティングセンター運営支援システムの改善とその評価」、大学ICT推進協議会2012年度年次大会論文集、396-399、2012
- [4] 佐渡島沙織、「自立した書き手を育てる：対話による書き直し」、国語科教育 66巻、11-8、2009
- [5] 山田礼子、「学士課程教育の質保証へむけて学生調査と初年次教育から見えてきたもの」、140-157、東信堂、2012